

No.459

ミジンコ・田んぼや湖にすむ小さな甲殻類こうかくるい一

田んぼに水が入るとカエルの鳴き声が聞こえてきます。6月ともなれば、オタマジャクシやヤゴなど、多くの生き物を目にすることができます。今回はあまり目につかないけれど大切な、田んぼの小さな住人しょうかいを紹介します。

田んぼの水の中を目を凝らしてのぞいてみると、ゴマ粒よりも小さな生き物が群れて泳いでいるのが見つかります。ミジンコ類です。ミジンコは淡水を代表する動物プランクトンで、小さな姿すがたをしています。エビやカニと同じ甲殻類こうかくるいです。冬は卵の状態たまご じょうたいで過ごし、田んぼに水が入ると孵化し、植物プランクトンなどを食べています。ミジンコは昆虫や小魚のえさえさとなり、ミジンコを食べる昆虫や小魚はさらにカエルや水鳥の餌になります。このように、ミジンコは食う食われるの関係（食物連鎖）の中で重要な役割を果たしています。

田んぼには他にも名前に「ミジンコ」とつく甲殻類がすんでいます。そのひとつ、ケンミジンコ（カイアシ）類は肉食で、小形のミジンコを食べることもあります。水底をせわしく動き回るカイミジンコかいけいちゅう（貝形虫）類は動物の遺骸いがいを好んで食べる田んぼの掃除屋そうじです。

これら田んぼの「ミジンコ」の多くは大きさ 0.5 ～ 2 mm。形のほか泳ぎ方にも違いがあるので、ルーペがあればどの種類か見分けることができます。透明な容器にすくって泳ぐ様子を観察するのも楽しいですよ。

(吉岡 翼)



▲ ミジンコ類の1種トゲオカメミジンコ。雌は3 mm 程になるため、肉眼でも泳いでいる姿を観察しやすい。背にある丸いものは卵。

